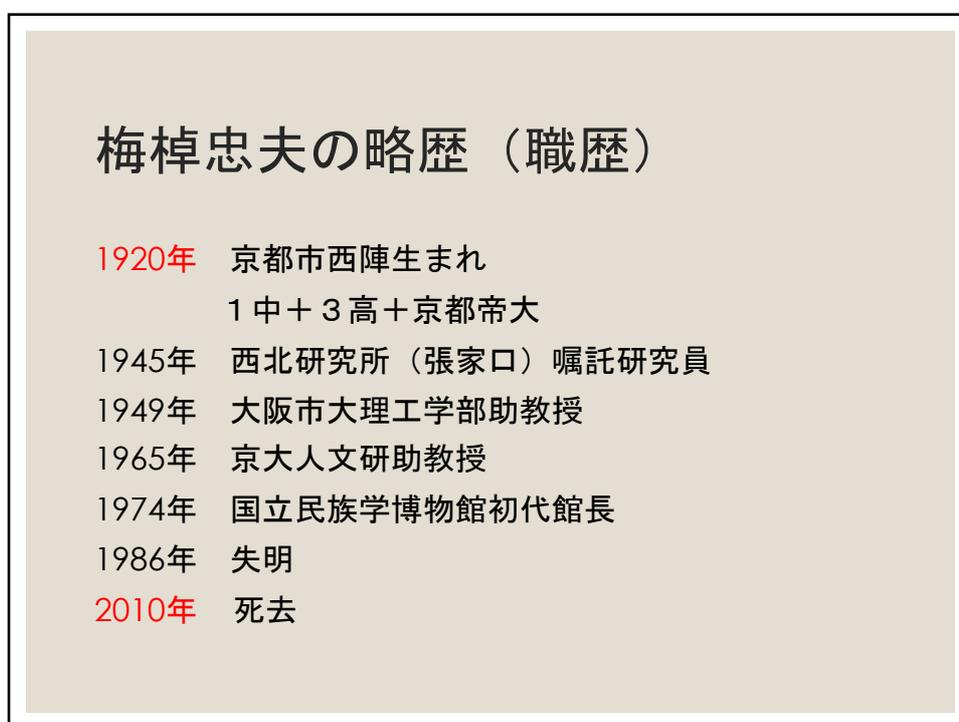


1



2

本日の流れ

- 1) 梅棹の思考方法の秘訣を探る
 - 1-1) アーカイブズ
 - 1-2) 社会的応答
 - 1-3) 旅

- 2) 国際教育拠点の価値を創る

3

梅棹忠夫先生との関係

- 1983年 内モンゴル調査資料の閲覧を希望して訪問
1986年 (失明)
- 1987年 みんなくくに就職
- 1988年 内モンゴル社会科学院に10ヶ月間の研修
- 1990年 梅棹忠夫著作集『モンゴル研究』(玉手箱の開梱と再開)
2010年 (逝去)
- 2011年 追悼展
『梅棹忠夫のことば』 『ひらめきを逃さない』 + 『人類の未来』
- 2013-14年 内モンゴル調査『スケッチ原画集』 『ローマ字カード集』
- 2017年 『ウメサオタダオが語る梅棹忠夫』

4



5



6

生誕100年記念展 (-2020.12.1)



7

フィールドからの知的生産



8

京大での新展示（2020.1.13-）



9

セルフアーカイブの3本柱

- 1) 著作物（自分の書いたもの）
- 2) 「一件ファイル」（他者との関わりの記録）
- 3) 「引紹批言録」
 - 引用／紹介／批判／言及
 - （自分について書かれたもの）

10

見出し付きファイル



11

マチ（襜）付きファイル (オーダーメイド=ツール設計)



12

原則その1 「捨てない」



13

原則その2 「まとめる」



14

原則その3 「美しくある」



15

原則その4 「CCで残す」 原則その5 「回収する」



16

“アーカイブ思想”

なにごとにかきとめておかなければ、すべては忘却のかなたにおきさられて、きえてしまう。歴史は、だれか他人がつくるものではなく、わたしたち自身がつくるものだ。わたしたち自身が、いまやっていることが、すなわち歴史である。

「近衛ロンドの五年間」『季刊人類学』1970年

17

尋常を超えて徹底した方法を実践 ＝（デジタル）時代の先取り

家庭を発信局とする情報創造がおこなわれ、そのための装置がつぎつぎとつくられるだろう。

文芸の究極形態は、読者を予想せず、自分自身にむけてかくということではないだろうか。セルフ・コミュニケーションである。

「新家庭論」『毎日新聞』1972年

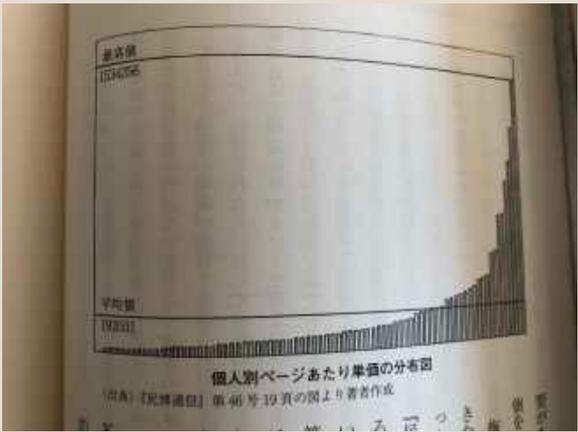
18



「あそび」
無意味の意味

1963年
アフリカ調査
ファイルの中
にあった洋酒
のラベル

19



アーカイブ
(記録)は
評価の源

1989年
「研究業績の
評価について」
『民博通信』
46号

20

“アジテーション思想”

1935年『山城三十山記』

「実に山は一大総合科学研究所であります。この研究所で、もっとうんとたがいに山を研究し、知識をまそうではありませんか」

1955年「アマチュア思想家宣言」『思想の科学』

普通の人びとがカメラを自由に使いこなすよう思想も使いこなすものだと鼓舞した。

※「思想」という言葉の初出／鶴見俊輔の回想「私が自分で実現することのできない、新しい日本語で書かれていた。『思想の科学』の行く道を照らす松明だった」2011年@特展図録

1957年「妻無用論」

「これからの女は爆発する」男女共同参画時代を予見するかのよ
うに女性たちを勇気づけ、社会に出るよう仕向けた。

21

専業主婦たちからの反撃の手紙！ →社会的応答の自覚



22

少年時代からdiaryではなくlog 「リーダー、参加者、梅棹」



23

モンゴル調査まで（20歳から25歳）

- 1940年07月 白頭山登頂
- 1940年12月 樺太踏査
- 1941年07月 ポナペ島調査隊
- 1942年05月 北部大興安嶺探検隊
- 1943年09月 京都大学理学部（繰り上げ）卒業
- 1944年05月 西北研究所@張家口
- 1944年9月6日～1945年2月26日 内モンゴル調査

24

フィールド・ノート約50冊



25

フィールドノートからカードへの転記

- 1) 妄想ノート（出発前の研究希望テーマリスト）
- 2) インデックスノート（整理のためのタグ付）
- 3) 日本語が変わる（耳で聞いてわかる日本語になる）

Cf.カード使い

インプット用「京大式カード」

アウトプット用「こざね」

26

ローマ字がきカード



27

『知的生産の技術』 1969

↑

「モンゴル調査」 (1944-1945) の記録との格闘結果

28

研究上の転換点

1) 関心の推移

動物から人へ、家畜から牧畜民へ

2) 研究領域の推移

生態学的研究から人文・社会科学的な研究へ

Cf. 拙稿「ゆるやかな転身のはじまり」

『梅棹忠夫—知的先覚者の軌跡』2011

29

思想家としての出発点

1) フィールドワーク後の整理

→のちの『知的生産の技術』1969年

2) 文明論の考察の起点

漢族農耕民とモンゴル牧畜民の接壤地帯

→カーブルからカルカッタへの旅（1955）を経て

→のちの「文明の生態史観序説」1957年

Cf. 拙稿「知的生産の七つ道具にみる思想」『考える人』2011

30

梅棹（1920-2010）の初期著作

- 1956 『モゴール族探検記』
- 1957 「文明の生態史観序説」@『中央公論』
- 1960 『日本探検』
- 1964 『東南アジア紀行』
- 1965 『サバンナの記録』
- 1969 『知的生産の技術』

31

『モゴール族探検記』 1956

1955 京大カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊(KUSE)
=戦後初の海外学術調査

アフガニスタンでモンゴル人の末裔を探す

多くの書評@梅棹アーカイブズ「[引紹批言録](#) citation+エゴサ

▶鶴見俊輔「戦後日本人の良心」

「日本人にしかできない仕事 梅棹忠夫『モゴール族探検記』」『婦人公論』1956-12:234

▶桑原武夫「新しい日本語」

「よく見える眼とはなにかー梅棹忠夫（著）『モゴール族探検記』」『図書』1956-10:16-17

32

フォルクスワーゲンで



33

シュルマン博士+Jr.レーリッヒ博士 (画家でもあるチベット学者の息子)



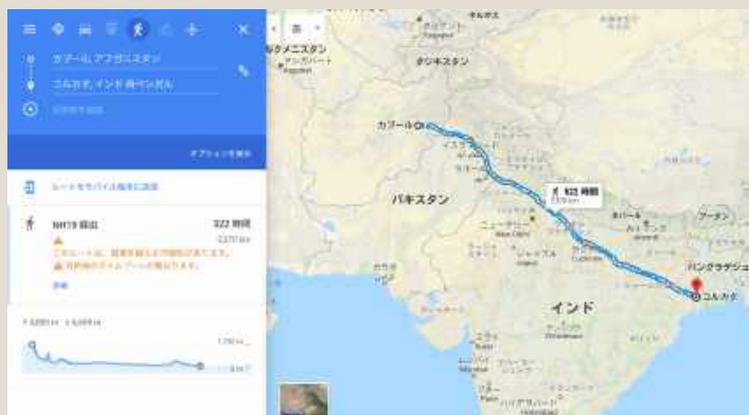
34

ローマ字記録／風景の写経by ラップトップタイプライター



35

「カーブルからカルカッタまで」 in 『中洋の国ぐに』



36

「文明の生態史観序説」

『中央公論』編集者が「序説」にした理由
=旅日記風

1955 KUSEの帰り道の単独行動
旅からの着想

37

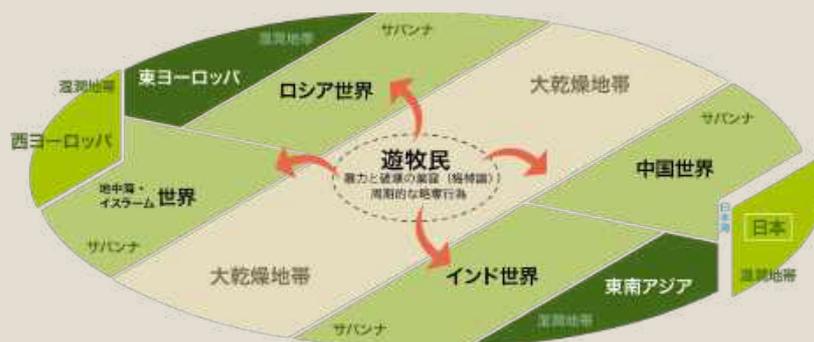
「文明の生態史観」1957

小松左京による評

「戦後提出された最も重要な世界史モデル・・・これまで東と西、アジア対ヨーロッパという、慣習的な座標軸の中に捉えられてきた世界史に革命的といっていほどの新しい視野をもたらした。この視野によって複雑に対立し、からみ合う世界の各地域の文明が、はじめてその「生きた現実」の多様性を保ったまま、統一的に整理される手がかりが与えられたといってい」

38

日本≒ドイツやイギリスなど



39

『日本探検』 1960

「なんにもしらないことはよいことだ。自分の足であるき、自分の眼でみて、その経験から、自由にかんがえを発展させることができるからだ。知識は、あるきながらえられる。あるきながら本をよみ、よみながらかんがえ、かんがえながらあるく。これはいちばんよい勉強の方法だと、わたしはかんがえている」(福山誠之館)

40

『東南アジア紀行』 1964

1957大阪市立大学東南アジア学術調査隊

写真+キャプション
=元祖インスタグラム

41

『サバンナの記録』 1965

1963 京都大学アフリカ学術調査隊

42

2種類の旅

- 1) 滞在型：アフリカ、モゴール族
- 2) 通過型：東南アジア、生態史観

→モンゴル調査はその両方

43

梅棹流思索法

- 1) 視座の移動
- 2) 対話による刺激
- 3) 夢見の力（「妄想」）

44

NHKETV特集
暗黒のあなたの光明
—文明学者 梅棹忠夫がみた未来—



45

科学未来館での巡回に発展



46

『人類の未来—暗黒のあなたの光明』 2011.12



47

河出書房『世界の歴史』全24巻

『人類の誕生』今西錦司から
『戦後の世界』桑原武夫まで
梅棹が『人類の未来』を提案 1970年頃
梅棹にとって最大の「筆債」
「こざね」「対談記録」

伴走した編集者とは知らずに紹介されていた小長谷が業務を引き継ぐことに...

48

未完の書『人類の未来』のこざね



49

副題は「プレイボーイのすすめ」

- 1) 「生きがい」を批判
- 2) 科学は人間の業
合目的的な科学には落とし穴がある
- 3) 純粋な興味こそ人間性の証

50

無用の用

「この地球上に出現した人類という知的生命体の栄光のために」

(...わたしは学問にはげんできたのである。)

1997年

『行為と妄想 わたしの履歴書』日本経済新聞社

51

「暗黒のあなたの光明」とは

人びとの知的な好奇心にこそ期待する

「理性」よりも「英知」

福島から光明を！

52

福島からFUKUSHIMAへ

- 1) 国際的なSDGsモデル：「周縁の中心化」
鄙が（多様な）国際的中心（の一つ）になること。
 - 2) 「人類の未来」から「地球の未来」「宇宙の未来」へ
 - 3) そのための技術開発は的を明確に（脱原発）
 - 4) 一般市民の発信局（日常のアーカイブ化）
 - 5) 「文化戦略」から「文明戦略」へ
- ノアハラリの「認識革命」／スコット『反穀物の人類史』
など人類史はただいま刷新中

53

「文化」と「文明」

文化というものは次第にダイバージェンスすなわち放散異化、ちがったものになっていく方向にすすむ

文明というものは、一種のコンバージェンスすなわち収斂あるいは同化、おなじようになっていく方向にすすんでいく。

文明＝装置

1986年「文明学と日本研究」→第5巻『統治機構の文明学』

54

「教育」と「文化」

教育は人間に対するチャージです。逆に文化はディスチャージ（放電）であります。教育はさまざまな活動の原動力のひとつですが、文化はその結果としておこる放電現象なのです。

1975年「文化国家論」→第21巻『都市と文化開発』

55

「博物館」（と「学校」）

むかしは、専門家と大衆のあいだにかなりの格差があったかもしれませんが、今日ではそういうものはほとんどなくなっている。プロフェッショナルとアマチュアというのは、いわばめしの種の違いだけのことであって、...それくらい今日のアマチュアは程度がたかいんだ、ということに覚悟して、...。

博物館というのは、いわば市民のための研究機関でありまして、市民の啓蒙機関ではございません。

1977年「民族学入門」→第10巻『民族学の世界』

56

「文化行政」国の品格の問題

文化行政は各戸に水を供給する仕事なのです。配管はたいへんです。……末端までのネットワークをつくってゆく。文化行政の仕事というのは、それとおなじように大規模な土木工事にちかいものだというふうにわたしはかんがえております。

1976年「新しい地域づくりと文化」→第21巻『都市と文化開発』

57

「日本のなきどころ」

免疫がまったくできていないままで、二一世紀に突入するということです。諸外国はみな民族問題でなやみぬいて、それぞれに経験をつんでいるにもかかわらず、日本文明だけが純粹培養文明としてとりのこされている。二一世紀において日本文明が直面する最大の問題のひとつは、これであろうかとわたしはかんがえています。

1984年「民族学から見た世界と日本」→第13巻『地球時代に生きる』

58

「受信過敏症」 「発信不能症」

これは、情報パッシブの文明であります。情報についてアクティブな態度が乏しい。そとに対しては自己主張をおさえ、謙譲の美德でゆく。その点では、たいへんおだやかな文明であります。世界には、自己主張がつよく、ときには情報アグレッシブともいえる文明もありますが、日本文明はまったくそういうことはありません。

1974年「国際交流と日本文明」→第13巻『地球時代に生きる』

59

FUKUSHIMA

「地球の未来」のために、
地域から情報を国際的に発信し、
文明の舵を切る人々が巣立つところ

60